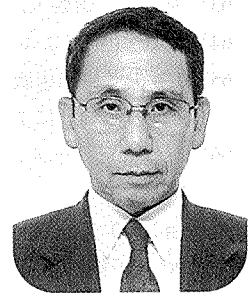


## ■ PC の先達の熱意を今想う



中 村 一 樹 \*

新潟県中越沖地震や台風の大規模化に加えて、海の向こうでは橋梁の崩落が大きく報じられ、社会インフラに対するこれまでの信頼を揺るがしかねない状況は、公共工事削減という逆風のなかで、PC 技術を営々と担ってきた PC 業界に更なる課題と試練を押し付けていると思われる。

このところの建設業界をめぐる急激な動きのなか、PC 業界に全体的に余裕が無くなってきて、漠然とした不安と不満が技術者間に広がりつつあるのも事実であり、とくに若手技術者の PC 業務に対するモチベーションを如何に維持するかは今もっとも大きな問題と思われる。事実、最近になって施工や技術面での単純ミスや労災事故の多発が顕著となってきたように思え、これは分業化やベテラン作業員の不足も原因の一部ではあるが、基本的に若い技術者の PC 技術に直に触れて自分のものにしようとする姿勢が不足している結果でもあると思われる。

日本での PC 技術が 50 年を超えて発展してきたなか、われわれ定年間近の世代は 30 数年間も PC の最前線に関わってこれたが、若い世代の多くはこれからという状況であろうし、そこに公共工事削減や業界再編の流れは、彼らにとって素直に容認できないものかも知れない。われわれの世代から若手への技術継承や技能伝承という大きな課題も抱えながら、彼らに対するケアを進めるうえで、PC 業界にとってさらに心配されることがある。

ここに至っての PC 技術協会会員の減少が顕著であり、ために協会運営面での改善努力を進めているものの、これまで経験しなかった状況に各方面から PC の将来を懸念する声も上がってきている。こうしたなかで、PC 技術協会誌はどのような役割を果たしてきたのか、これから何を果たすべきかを

考えてみようと思ひ、ために技術協会誌の創刊号を読む機会があった。

Vol.1 No.1 としての発行は昭和 33 年（1958 年）9 月 1 日であり、故に今年 2007 年は 49 年目、来年は Vol.50 という節目の発刊となる。創刊号を熟読すると、専業者や鋼材メーカー等関連各社が集まり、PC の将来に夢と思いを込めて創刊に至ったことが各所に記されており、先達諸氏の当時の大いなる意欲と使命感に今更ながら感銘を受ける。

「創刊の辞」は吉田徳次郎初代会長が執筆され、「PC の発展は技術協会誌の発展次第」であり、リラクゼーションやクリーブ等の解明が不十分という課題はあるとしても、今後徐々に解決されるものとして、まずは安全率に余裕をもたせたまま PC 構造物の普及を図ることとした旨が記載されている。さらに日本の PC を国際的に進歩発達させるために、FIP の知見を紹介する役目を PC 技術協会誌に託すことが記され、会員各位の熱意と尽力により、学び、知らせあって、分かりやすく役に立つ会誌となることを念願されている。

以来 50 年近くの間、恵まれた環境のもとで順調に日本での PC 技術は発展してきたが、最近の公共事業縮小のなかで PC 技術が全体的に停滞しているのは事実であり、若手技術者の意識の問題や会員減少の問題と併せ、「PC 技術の危機」にあることは間違いないと考える。

今 PC 技術協会と技術協会誌の再生を実現できなければ、今後は衰退し完全にコンクリートの部分技術でしかなくなるのは必至であろう。先達の熱意を思い起こし、21 世紀の PC 技術の発展に何ができるか、やるべきかを考えながら PC 技術協会を盛り立てていきたいと思う。

\* Kazuki NAKAMURA : オリエンタル建設(株) 工務部長